

マーカンチリズム研究

伊藤久秋

一 マーカンチリズムの本質

中世紀以來の歐洲諸國の歴史は總括して之を國家の自意識發展の歴史と稱することが出来る⁽¹⁾。すなはち他人に對する自己を意識し他と我との對立を覺ゆる心的過程が漸次に國家的關係を支配し行けるの歴史である。言葉を換ふれば國家人格の成立と其發展の歴史は是である。而して各國家が孰れも其人格を意識し之を發展せしむることは、結局に於て各國家間の爭鬭の形に於て發現する。すなはち内に對して、中央集權の確立による内部的統一と鞏固とをばかる一方、外に對しては自己の權力擴張と他の權力の抑制を目的とする政策の發達を來さざるを得ない。所謂理性的國家の政策は是である。マーカンチリズムは此理性的國家政策の經濟的一面に過ぎない。従てこれは近世初頭に於ける政治的歴史と離すべからざる密接なる關係に在るものである。

中世紀に於て人々を支配したる世界的教會と世界的帝國の夢想が、漸次その姿を沒するに至

(1) Heyking, Zur Geschichte d. Handelsbilanztheorie, Berlin 1880, S. 1

つて、これに代つて現はれたるものは、諸國對立の觀念である。ルネッサンス及び宗教改革によつて起つた個人主張的思想の一つの發現と見ることも可能であらう。併し新らしく起つた近世國家は、その臣下に對して依然として強き奉仕的生活を強ひた。これ古き傳統的思想より脱することの如何に困難なるかを證するものである。中世紀に於て各個人は、或包括的全體の一分子としてのみ存在した。一定の社會的階級、ギルド等の組成員としてのみ其地位を保つてゐた。而して其組合、これを包擁する都市國家を指導したる所の思想は、義務正義の觀念である。平和安靜なる全體の存在こそ目的とすべきものであつて、他人を顧みざる個人の發達は許され得ざる所であつた。經濟的生産は中世紀的觀念に従へば個人的利益營利に關係する事柄にあらずして社會的の職務である。社會的職務としての生産を行ふに就ては道德と法律とを嚴守しなければならない。産業を以て社會的義務なりとする此觀念よりして産業經營に對する煩雜詳密なる取締は生じたのである。製品の品質、價格の公正なる形成等は、かくの如き見地よりして努められた。中世都市の經濟政策が全體の利益の爲に立てられたる統一的政策としてマーカンチリズムの先驅をなす所以である。近世國家の形をとりし國家絶對主義は此中世紀的觀念をそのままに踏襲して、之を廣き國家生活の上に移し植えたのである。ただ著しく私法的性質を帶びたる義務が公法的性質を有するに至つたのみである。中世紀の制度が如何に近世國家の

下に踏襲され新らしき衣の中に其存在を保たしめられたかは、有名なるエリザベス徒弟條例が中世紀ギルドの勞働關係を一般化し法律化した一例を見れば明である。

國家絶對主義の下に個人は奉仕的生活を強制された。併し何の爲の奉仕であるか。外部に對する國家人格の存立を保ち、之を益々鞏固ならしむる爲の奉仕である。ナチオン(國民)の概念は中世紀に於て知られざりし所、新らしき近世國家成立の時に至つて始めて形成されたるものである⁽¹⁾。ホッブスが國家を以て一の人格者なりと道破したるは十七世紀中頃に屬すと雖、

その思想は既に近世初頭にありと云はねばならない。國民なる概念が発生し、國家人格の意識が發展したる時、個人は全體の爲に存すこの思想を利用して行はれたる政策を、經濟的方面より見て、吾人はマーカンチリズムと呼ぶのである。その内容は國家富強の政策に過ぎないが、飽くまでも國家絶對主義がその政策の根基を形成することを忘れてはならない。マーカンチリズムは富の哲學(Philosophie des Reichthums)である。(ディーチェル)⁽²⁾ 併しスミスの體系も富の哲學と呼ばれ得る以上、兩者の對立點は、明に前者の國家絶對主義にある。貿易の獎勵と云ひ、人口の増加と稱し、加工生産の助長と云ひ、土地の開發と稱すあらゆる實際的方策は皆統一的國家の手に由て、その監督になつて行はれ得べく、又行はる可しと云ふのがマーカンチリストの所信であつて、マーカンチリズムを以て終始一貫せる最初の國家的經濟政策と呼ぶ所以は茲

(1) Mombert, Geschichte d. Nationalökonomie, S. 107

(2) Dietzel, Theoretische Socialökonomik, S. 135

にある⁽³⁾。その經濟政策の内容には、時代の一般的經濟發達の段階に従て、或程度の共通點を認め得ることは當然であるが、なほ各國各年代の發達程度及事情に従つて幾多の變化と相異を見出すことも容易である。故にマーカンチリズムの本質を或具體的な政策や、乃至はその政策を發生せしむる所の或經濟學說に認むることは不可能である。(此點は更に述べる。)

マーカンチリズムが經濟學史の上に意義を有するは、それが或經濟學說を發展せしめたるが故にあらずして、寧ろ國家主義の旗幟高くかざして、經濟政策を一貫したる所に基くのである。中世紀に於てハンゲ同盟及び伊太利の商業共和國により代表せられたる世界商業を打破して、異なる國家の存在する所亦異なる利害ありてふ思想の下に國民的商業政策を樹立したる所にマーカンチリストの大きいなる意義が存在するのである。經濟政策の相對性は彼等に於て強調されたのである。マーカンチリストの殿將とも云ふべきスチュアートは曰く“*The very existence of foreign trade, implies a separate interest between those nations who are found on the opposite side of the mercantile contract, as both endeavour to make the best bargain possible for themselves.*” (Sir J. Steuart, *Principle of Political Economy*, London, 1767, BK. II. ch. XVI, Vol. I. P. 273) 中世紀に於て歐洲諸國の騎士僧侶等が他の諸國の同種階級と結合すること多く、又今日の資本家労働者等が互に國際的に各々他國の同種階級と連絡し結合するの傾向大なるに反し、國際的カルテル、

(3) Max Weber, *Wirtschaftsgeschichte*, S. 293

トラストを見よ、「萬國の無産者結合せよ」の標語を見よ）マーカンチリズムは國家主義の香高く此兩世界主義的時代の間に屹立せるものである。更に又スミス以來の經濟學が個々人、其利益にのみ注目するの傾向大なるに反し、マーカンチリズムは國民的觀察を唱ふる經濟學の筆頭である⁽¹⁾。

マーカンチリズムの意義を定むるに或は貨幣尊重の觀念、貿易差額等を標準とすることは正しいと云へない。シュモラー此點に關して云ふ『此システムの本質は貨幣増殖或は貿易差額に關する或種學說や、關稅線、保護關稅及び航海條例如きに存するにあらずして、更により大なる或物にあるのである——即ち社會及び其組織並に國家及び其制度の徹底的改造、地方的農業的經濟政策の國家的及び國民的經濟政策による轉換にあるのである』と⁽²⁾。マーカンチリズムなる文字は商業或はより適切に云へば貿易を以て國家の富の源泉なりとする思想を包含するものであるが、マーカンチリズムは決して貿易の尊重を以て終始したるものではない。貿易の尊重はマーカンチリズム政策の重要な内容を成したる事認むべしと雖、決して其本質と目すべきものではない。貿易の尊重は廣く一國々權の擴張を圖る目的に對する一手段たるに過ぎない。凡そ國家權力の擴張をはかるが爲に經濟的富力の増進を必要とすることは特に多言を要しない。カンニングガム曰く『チュドル朝に於て既に國民の富の増進は歐洲に於ける英國の權勢を

(1) Roscher, Geschichte d. Nationalökonomie in Deutschland. (SS. 231, 232) 參照

(2) Schmoller, Das Merkantilssystem SS. 43-44

高むる條件の一なりと云ふ明瞭なる信念は確立されてゐた。最も廣義に於ける國富は亦國家權力の基礎なりとせられたのである。茲に於て國富の増進は政治の主要目的となり、世界に於ける國民の權力を鞏固にする手段となつた」と⁽¹⁾。若し夫れ一國の富の増加を圖らんが爲に何故に爲政家は特に貿易に重きを置きたるかの問題に至らば吾人は近世國家成立の當時に於ける諸種の經濟的變遷を考察しなければならぬ。

『マーカンチリスト政策の前提は自國に於ける出来るだけ多くの貨幣獲得の源泉を開發するにあつた。』(マックス・ウェーバー)⁽²⁾ 併し眞にマーカンチリストは貨幣と富とを混同したのではない。國家の富は其國民の納稅力の強弱に由て定まり、國民納稅力の強弱は貨幣即ち金銀の多少に由て定まると信じたのである。金銀を尊重するに至つたことは自然經濟より漸く貨幣經濟に進展し來れる當時の時勢に基いたのである。

中世紀經濟の本質は使用價值の生産にあつた(註一)。すなはち自己の使用の爲にする生活資料の生産が中世紀的經濟の特質であつた。これ各人に十分の食料(Nahrung)を與ふと云ふ思想が中世紀爲政家の指導的原理であつたことと相應する。交換は自己の必要を満したる後の餘剩物につきて行はれたるに過ぎない。マーカンチリストが普通に商業に重きを置くと稱しながら、而も商業を以て生活必要品を得る爲の餘剩品の交換と定義せることは(註二)彼等の時代がなほ

(1) W. Cunningham, Ad. Smith und die Mercantilisten, Zeitschrift für die gesammte Staatswissenschaft. 1884. S. 46

(2) Max Weber, Wirtschaftsgeschichte, S. 297

自然經濟を相去ること遠からざりしこと、並に經濟史上商業發生の由來を説明せるものである。

註一、誤解なきやう一言すべきことは、茲に云ふ所は一般論であるといふことである。經濟的文化の關する限りに於て一般的に中世紀は古代に比して一の退歩を意味する。併し西羅馬帝國滅亡(四七六年)の後に於ても東羅馬帝國に於て古代の文化はなほ數百年の生命を保つた。そこに都市の繁榮と、ギルドの組織と遠地貿易の存在を見た。古代に於けると同じき資本主義狀態を認め、一定目的の追求に向けられたる國家的經濟政策に於てマーカンチリスト政策の先驅をすら認め得る。東方を去つて西方に到る時、古代文化の滅亡は一般狀態ではあつたが、なほ羅馬人偉業の跡は或程度に於て保存せられ、又ゲルマン民族によつて吸收された。羅馬の文化が最も力強く發展したる所、すなはち伊太利、ラインの河畔、及びガリーンの一部の如きに於て、古代の名殘をこめたる工業、商業、貨幣經濟の多くを見たるは當然である。從て吾人は中世初期に於ても完全なる自然經濟の支配を云々することは許されない。併しそれにも拘らず吾人が、中世紀を以て自然經濟の時代と云ふことが出来るのは、蓋し、理想型(Idealtypus)の意味に於て云ふのである。

註二、例へばメロン(Melion)は其 Essai politique sur le Commerce に於て『商業は必要品に對する餘剰品の交換なり』(Le commerce est l'échange du superflu pour le nécessaire)と定義し、(Ch. I. p. 709, Paris chez Guillaume 1843) ハメチ(Justi)は其 Grundsätze d. Polizeiwissenschaft (3. Ausgabe 1782) に於て餘剰財の輸出 (die Ausfuhr der überflüssigen Güter) は外國貿易の根柢にして國民の富の源泉なりと論じ (S. 205) フォルホネー (Forbonnais) も同様に外國貿易を分解して『其餘剰品の輸出、外國品の輸入』(l'exportation de leur superflu, et l'importation des denrées étrangères) とした。(Éléments du Commerce I. Partie 2. éd., a. Leyde 1754 p. 6) 餘剰品のみが交換せらるるを觀念はなほコンシヤックに見らる。
“Ce ne sont pas les choses nécessaires à notre consommation, que nous sommes censés mettre en vente : c'est notre surabondant, comme je l'ai remarqué plusieurs fois, nous voulons livrer une chose qui nous est inutile, pour nous en procurer une qui nous est

nécessaire: nous voulons donner moins pour plus" (Condillac, Le Commerce et le Gouvernement, ch. VI. P. 267—Paris chez Guillaumin, 1847)

元と餘剩物につきてのみ行はれたる商業は進んで最初より交換を目的とする生産物につきて行はるゝに至る。交換價值の生産の開始である。ゼームス・スチュアルトは既に交換價值の生産が近世の經濟生活を支配することを道破した⁽¹⁾。交換價值の生産とは即ち商品(Ware)の生産である。商品の發生によりて富の發生を來す。『社會の富は龐大なる商品集積』(マルクス)であるからである⁽²⁾。勿論商品の發生以前に於ても物(即使用價值)の餘剩は存在すれど、これ今日の意味に於ける富ではない。社會的概念としての富は交換價值の存在を前提とする。商品の生産が發展し始め交換價值の概念が起るに至りて、交換價值の概念は一物質即ち金及銀に具體化される。金銀は常に何人よりも愛好せられ、從て常に交換價值を有するものである。他の物より多く、又常に交換價值を有する所の商品が、粗笨なる聯想によつて交換價值自體の具體と見らるるに至ること自然の經路である。交換價值の集積によつて富は形成さるるが故に金銀はかくて富の具體なるが如く取扱はるるに至つた⁽³⁾。從て彼等は表面上、富と金銀とを同一視し、或は、混同したるの觀がある。併し彼等と雖、その區別を知らなかつたのではない。ミダスの譬は此謬想を避けしむるに十分であつたであらう。彼等と雖その區別は承知しながら、これを同

(1) Sir James Steuart, Principles of Political Economy. Vol. I. BK. II. Ch. XXVIII (PP. 394—)

(2) Marx, Das Kapital, I. Abschnitt, 1. Kap.

一に取扱ふに何等の不都合を感じなかつたのみである。マーカントリストが富と金銀とを混同したりと云ふことを得ば、同一の意味に於て今日の企業家も亦多くの場合、富と金銀(貨幣)とを混同せりと云ふことが出来る(註)。

註 貨幣の意義を正當に認めたるものとしてアナルボーンホーの次の句を擧げ得る。L'argent n'étant pas capable d'apporter par lui même de nouvelles valeurs dans la circulation—n'est qu'une richesse conventionnelle. “(Forbonnais, Principes économiques Ch. I.—Heyking ibid. S. 8. の引用による。)

ロウソクの見る所も同様である。彼によれば金銀は眞に吾人に役立つものではないが、眞實の有用物の大部分は一般に耐久力なく滅失し易いものである。之に反して金銀金剛石は耐久性があり、人の好みと約束によつて、價值が置かれるものである。之によつて初めて富の蓄積といふことが可能になる。“The greatest part of things really useful to the life of man, and such as the necessity of subsisting made the first commoners of the world look after are generally things of short duration; such as, if they are not consumed by use, will decay and perish of themselves: gold, silver and diamonds are things that fancy or agreement hath put the value on, more than real use, and the necessary support of life. Now of these good things which nature hath provided in common, every one had a right (as hath been said) to as much as he could use, and property in all that he could effect with his labour; all that his industry could extend to, to alter from the state nature had put in it, was his. He that gathered a hundred bushels of acorns or apples, had thereby a property in them; they were his goods as soon as gathered. He was only to look that he used them before they spoiled, else he took more than his share, and robbed others. And indeed it was a foolish thing, as well as dishonest, to hoard up more than he could make use of. If he gave away a part to any body else, so that it perished not uselessly in his possession, these he also made use of. And if he also bartered away plums, that would have rotted in a week, for nuts that would last good for

his eating a whole year he did no injury; he wasted not the common stock; destroyed no part of the portion of the goods that belonged to others, so long as nothing perished uselessly in his hands. Again, if he would give his nuts for a piece of metal pleased with its colour; or exchange his sheep, for shells, or wool for a sparkling pebble or a diamond, and keep those by him all his life he invaded not the right of others; he might heap as much of these durable things as he pleased; the exceeding of the bounds of his just property not lying in the largeness of his possession, but the perishing of any thing uselessly in it. (Locke, Of Civil Government. § 46) And thus came in the use of money, some lasting thing that men might keep without spoiling, and that by mutual consent men would take without spoiling, and that by mutual consent men would take in exchange for the true useful, but perishable supports of life. (§ 47)

中世紀の法律秩序は各人に勞働の權利或は生活資料に對する權利を保障した。然るに今、此保障の條帶が解かれて各人自由に生活資料を獲得すべき状態に移るに及んで、人民の生活問題は要するに交換價值の具體たる金銀獲得の問題として映するに至つた。人民の富裕は納稅力を大ならしめ、以て國庫を豊富ならしむる所以と考へられたるは當然である。剩る中世紀的騎士に代つて傭兵制度の出現と、新式武器の採用とは頻發する戰爭をして益々高價なる支出とならしめた。此等の事情は交換價值の具體なりと見られたる所の金銀(貨幣)をして、自己意識に目覺めつゝある近世國家の眼に、獲得追求の目的物として現はれしめたのである。然らば何故に外國貿易が此目的に對する手段として選ばるるに至つたか。我等は今漸くにして此問題に結末をつけることが出来る。

我等は既に商業が交換價值の生産の爲に行はるるに至つたことを述べた、而して商業の中、外國貿易は交換價值の生産を以て經濟行爲の目的たらしめたる最初の領域である。權威と慣習に支配せられたる中世紀の經濟生活に於て使用價值の生産がその中軸を成したることは前述の如し。中世紀の幕が漸くにして閉ざされんとする其末期に於ても、内國的生産は、なほ依然として使用價值生産の中世紀的經濟組織に固着し、或は既に之より解放し始めた所に於ても、なほ未だ數歩を進めず、之に反して外國貿易は早くより可成的最大の利潤追求の原理によつて支配せられた。『商品の交換は、社會の終結する所、その外國社會と、或は外國社會の局部と接觸するに至る點に於て始まるものである。併し物が對外生活に於て商品となるや、それは反射的に内部生活に於ても商品となる。』(マルクス)⁽¹⁾ 權威と慣習とに拘束せらるることなく、對外商人は、可成最大の利潤を求むることが出來た。商賈は戰士であり、貿易は戰であつたからである。ゲーテはメフィストをして云はしむ。

Man hat Gewalt, so hat man Recht,

Man fragt ums was, und nicht ums wie.

Ich müsste keine Schifffahrt kennen:

Krieg, Handel und Piraterie,

(1) Marx. Das Kapital, 1. Buck, 1. Abschnitt, 2. Kap. S. 50 (Volksausgabe 1. Bd.)

Dreieinig sind sie, nicht zu trennen.

内地交通路未だ發達せず、海上の交通が最も自由容易なる接觸の方法たりしことも亦此發展傾向に對して意義を有するであらう。兎に角外國貿易は當時、交換價值生産の方法としては獨占的地位を占めた。從て貨幣金銀を集積したる者は外國貿易に従ひたる商人であつた。この事實が貨幣を要求する近世國家をして、内地に金銀礦を産出し得ざる限り、之を獲得する手段方法として外國貿易に眼を向けしめたのも自然の勢である。

併し茲に誤解なきやう一言すべきことは、マーカンチリストは決して外國貿易、從つてその輸出物件たる工業的生産にのみ重きを置いたものでないことである。この事はマーカンチリズム(重商主義)を重農主義、重工主義(Industriesystem)と對立せしめたる、從來の企圖の誤を暴露するに足るものである。既にビダーマンは、Botero, Jean Bodin, Olbrecht, Klock, Becher, Schröder, Hornick, Dutot, Bandini, Galani に就てその例證をあげ⁽¹⁾ヘルドも亦マーカンチリズムの特徴を農業より商工業を重んずる點に認むるを排斥し、農業の考慮は決して絶對的にマーカンチリズムと相容れざるものにあらざることを指摘した⁽²⁾。この事は亦マーカンチリストが富と金銀とを同一視せるものにあらざることを證するものである。

金銀と富の同一視、貿易の偏重、孰れもマーカンチリズムの本質と稱するを得ずとすれば、

(1) Bidermann. Über den Merkantilismus. 1870, SS. 11ff.

(2) A. Held, Carey's Socialwissenschaft und 'das Merkantilsystem 1866, S. 165; 及

マーカンチリズムの概念は何を中心として構成するを得るか。マーカンチリズムは決して學說の體系ではない。或經濟學說によつて其本質を捕へ出さんとする試みは何れも失敗した。矛盾撞着せる學說が平然として同居してゐるからである。然らば此問題を解決する方法として考へ得ることは、既に劈頭に一言したるが如く、當時の政治的事情によつて、これを解くことである。この觀察點に立つて見る場合に於て、吾等は或共通なるものを見出し得るのである。

二 マーカンチリズムに對する諸家の解釋

マーカンチリズムとは何ぞや、その本質如何は以上の所を以て明にしたりと信ずる。併しマーカンチリズムの本質に關してはアダムスミス以來多くの異說が吐かれたるものであつて、今日と雖、諸家の見解決して一致せるものではない。

アダムスミスがマーカンチリズムを如何に解したるかは國富論第四卷第一章にあらはれてゐる。commercial or mercantile system とは彼が與へたる名稱である。彼は恰も個人に於て、富むことは貨幣を得ることであり、從て富と貨幣とは普通の言葉に於て凡ての點に於て同意義であると見らるるが如く、富める國は貨幣の豊富なる國であると考へられ、金銀を蓄積することは致富の捷徑であると考へらるると説明してゐる。この一節によつてスミスは、マーカンチリ

ストは凡て富と金銀とを同一視するものなりと解したるが如く思はれてゐる。併しスミスを正當に解せんが爲には、彼自身此點に關して用意周到なる論者あることを註釋せる一事を忘れてはならない。すなはちマーカンチリストの中には、一國が他の世界より孤立せる場合に於ては貨幣の流通高は何等の意義をなさず、一國の眞の貧富(the real wealth or poverty)は全然、消費財の豐饒又は稀少に懸ると認むるも、他の諸國と關係を結び、外國に於て戰爭を爲し、遠隔の地に海軍陸軍を維持する必要を有する國に於ては、貨幣を豫てより國內に蓄積し置くことを要すとなすものがある⁽¹⁾。次にスミスは金銀蓄積の爲め貴金屬の輸出禁止の政策が時代に適せずして、トマス・マンの貿易差額説が行はるるに至つたことを述べ、これが批評に移つてゐる。此點に於て我等の氣付くことは、マーカンチリズムの本質をスミスは、此等個々の政策の何れかと同一視するものでもないと云ふことである。何となれば彼はマーカンタイル・システムの題下に之等個々の異なる政策を叙し來つてゐるからである。従て彼がマーカンチリズムの本質とする所は、金銀の増加、従つて亦その蓄積量の減少の豫防が一國(外國と關係を結び、従つて之と對立する國)の繁榮の條件であると云ふ思想であるとすべきであらう。富と金銀との混同にマーカンチリズムの本質ありとスミスが解釋したりとは思はれない。

マーカンチリズムに關するスミスの解釋は、多くの學者に踏襲された。其代表者として獨逸

(1) Wealth of Nations, BK. IV., Ch. 1. Cannan's ed., p. 397

のハインリツヒ・ラウを擧げる。彼は曰く『重商主義(Handelsystem)の根本的誤謬は、個人が貨幣利潤によつて富むが如く、全國民に於ても、金屬貨幣の増加は富裕(Wohlstand)増進の最良手段であるとの結論にある。金屬貨幣はそれ自身に於て毫も人の慾望を充足せざることは見のがし得ないことであるにも拘らず、此金屬貨幣の過重視より脱することは出来なかつた。自己の礦山より金銀を獲得し得ざる國にとつては、之を増加する永久的手段としては、貿易により外國より誘致する外はなかつた。此目的の爲には内國製の多くの商品を輸出すべく、一方に於て多くの外國品を輸入すべからずとし、然る時は、輸入に對する輸出の超過全額は外國より貨幣を以て支拂はるべしと見たのである。輸出輸入額の産額は貿易差額(Handelsbilanz)と呼ばれ、輸出が輸入より大なる時、之を有利とした。之に反して鑄貨或は鑄貨材料の流出を公益に害ありと見た。各國の貿易差額の統計的調査は主要な仕事となり、内國商業は毫も貨幣量の増加を來さざるが故に問題でない、或は重要でないとした。』⁽¹⁾。

ラウはマーカンチリズムが貫徹せる經濟學說にあらざることを指摘した。彼は曰く『重商主義は、その説が整然たる關係をもたず、深い研究に立脚せず、ただ皮相的に樹てられてゐる點に於て既に學問の幼稚を窺はしめる。此主義に屬する個々の説には、既に十六世紀の著者に於て出會すことがあり、十七世紀及び十八世紀の前半に於ては、遙に頻繁になる。十六世紀から

經濟學の個々の部分に就て鋭い眼を以て著述した伊太利の學者の中には重商主義に傾倒せる者多く、少くとも一部分之に捉はれたる者が若干ある。併し上述の如き見解に於て完全な一致は到底見出せない。若干の著者は假に主要點、例へば内國取引の尊重や、貨幣の職務につきて、餘程正しい觀念に傾き、ただ有利なる貿易差額に高い價值を置いたことによつて貿易差額説の遵奉者たることを示してゐる。或者は國富の條件を深く洞觀し、貿易差額に關して正當な考をもち、又貿易自由の利益を認識したと⁽¹⁾。これによつて見ればラウはマーカンチリズムをシステムとは呼びながら、決して一貫せる眞のシステムとは見てゐない。一部分理論的、一部分實際的の性質をもつた、或關連せる思想の一例と解してゐるのである。

併しスミス及び之を繼承せる學者の注意深い説明解釋は、或學者に於ては全然閑却された。例ば獨逸の學者マックス・ウィルトは曰く『マーカンチルシステムは、文字の上では商業のシステムであるが、内容によつて云へば寧ろ封鎖のシステム(Sperre-system)と呼ぶを良しとす、而してその起源を、財産は眞に貨幣、金及び銀により成立すといふ觀念に負ふのである。外見によつて物事を判する人々は、貨幣によつて如何なる時でも、凡ての物を得ることが出來、又貨幣をただ輕微な價格の變動に會ふのみであり、同時に外の商品よりも破損することが少いと見た。茲に於て、他の凡ての財は貨幣によつて獲得し得べき享樂に過ぎないと云ふ見解が巢くう

(1) *ibid.*, § 37

(2) Max Wirth, *Grundzüge der National-Oekonomie* (Köln, 1856) 1. Bd. S. 93

て來た。従つて國家經濟の一切の方策は、生産自體が之に由て阻止されるか促進されるかに考慮を拂ふことなく、ただ貨幣増加の方面に向けられた』と。

ブランキに至つては遙に極端である。彼は此システムを毫も買はずして常に賣らんとする主義となし之が建設をシャル五世の事業とする⁽¹⁾。英國に於けるスミス學派の祖述者たるマツカロックも『マーカンタイル・システムの支持者は、其前進者と同じく、金及び銀のみが富を形成すとなした』と云ひ⁽²⁾、トラバース・トウイスは貴金屬を以て唯一なる眞の富の要素 (the only real element of wealth) とする舊來の觀念を維持しながら、交換助成の手段としての其使用の範圍を或條件の下に於ては擴大することを許す人々をマーカンタイル・システムの遵奉者となした。或條件と云ふのは、貴金屬と交換して得たる商品が或他の外國市場に於て、ヨリ大なる正貨を獲得し得るか、或は内國品の増加輸出の價值が外國品の増加輸入の價值を超過するか、之である⁽³⁾。すなはち彼は貿易差額説にマーカンチリズムの本質を認むるものである。ここに於て彼はトマス・マンを以て此システムの創始者とするが如くである。

マーカンチリズムを學說の體系と見、従つてフィジオクラシーに先んずる學派の名として之を用ふることに對してはウイルヘルム・ロツシャーが再び反對を表明した。彼は曰く『フィジオクラットに先んずる國民經濟學の全發展期をマーカンチリズムの名を以て表はす吾人一般

(1) Ad. Blanqui, Histoire de l'économie politique, Paris 1837 t. II. p. 25

(2) M'Culloch, Discourse on the Rise, Progress, Peculiar Objects, and Importance of Political Economy, 1824, p. 25

の慣例は少くとも甚だ不充分なものである。教科書の傳統がマーカンチリストなりとして描いて來た世間周知の想圖は、成程十七、十八世紀の餘り重要なならざる若干の著者には當嵌るけれども、最重要なる人々に對しては決して當らない。或點では之と合致するが、他の同様に重要な點では、全く之と離れてゐる。マン、チャイルド、ダベナントの如き種々異なる人々をマーカンチリストの一語を以てあらはすのは、丁度、カトリック教會史家が、ヘングステンベルグよりシュトラウスに至る凡ての新教神學者を、非カトリック教徒或は異端者の一語を以て十分にあらはし得たと考ふると同様に當らない。約言すれば、國民經濟學文獻をマーカンチリズム、フイジオクラシー及びインドゥストリーシステムに分つ慣行は、成程便宜であるが、實は十分な理由がない。少くとも吾人の教科書は十六及び十七世紀の文獻を二つの異なつた篇に於て論じなくてはならないであらう。大陸に關する一篇はマーカンチリズムの表題を襲用してもよいが、他の一篇は『舊英國學派』*ilhere englische Schule* の頭書せられねばならない』と。ロッシヤの此提案は多く顧られなかつたが、マーカンチリズムの正當なる理解の上に彼の研究は著しく貢獻した。

マーカンチリズムの本質に關する見解は、アドルフ・ヘルドに至つて大いなる進歩を示した。彼從來の見解を排して曰く『マーカンチルシステムの主要標幟として、普通、貨幣を唯一の、

或は少くとも最も重要な富として過度に重視したこと、それから有利なる貿易差額の必要を主張することが挙げられ、或は更に農業よりも工業を重んずることが附加せられる。第一の點に關して云へば、貨幣の本體及び職務は既に多くのマーカンチリストによつて正確に認められ、又貨幣は屢々主たる考慮の對象をなしたが、これが爲に唯一の富と見られはしなかつた。成程貨幣は、主として初期のマーカンチリストに由て、過重視せられたが、それでも純然たるミダ斯的の觀念は何處にも支配してゐない、ただ舊來の粗笨な俗見が、システムにきつちり合致するわけではなく、その殘骸を維持してゐたのみであり、或は説明の中にあらはれた貨幣と財とを混同するが如き語法の不正確に坐するか、乃至は最後に、貨幣の過重視は獨立の根本思想ではなく、他の偏重的學說、例へば、外國貿易に對する過度の期待の單なる結果であるか、何れかである。兎に角、後期のマーカンチリストに於ては、無批判的な貨幣熱の痕跡は最早之を認め得ない。寧ろ有利なる貿易差額の考慮をマーカンチルシステムの主要標幟とすること、より正當である、尤も此說もシステム後期の發展に於ては最早、變化せる根本思想に對する舊來の同一形式たりしに過ぎない』⁽¹⁾。又曰く『貿易差額の說及び此中にひそむ經濟學的誤謬は、なほそれのみによつては、マーカンチルシステムの全體を網羅的にあらはすには足らない』と。

(5.7) ヘルドは、更にマーカンチリスト、フイジオクラット及び重工主義(Industriesystem)の主

張者に三分する通説はこれによつて斯學の支配的根本觀念に於ける三つの最強き變革が行はれたるを暗示する意味に於て正しとなし、之に反し、三學派の各々は、若干の確定的學説をもち、これに屬する凡ての學者に此學説を認め得べしと云ふ考は誤であるとなした。(SS. 34) ヘルドの此見解は正鵠を得たりと云ふべきである。進んで彼が政治的傾向によつてマーカンチリズムの本質を解せんとする一般的态度も吾人の賛する所である。併し彼がマーカンチリズムの主要標幟を政府の指導命令、警察的方策への傾向に認めんとする (S. 26) 一點に至つては、異論なきを得ない。吾人はマーカンチリズムが國家絶對主義なるを認む。而して又煩些なる警察的監督が此國家絶對主義によつて樹てられたることを認む。併し此警察的監督の傾向を以てマーカンチリズムの主要標幟とするは餘りに外形に拘泥せる説である。マーカンチリズムは個人の利益を國家全體の利益の下に屈服せんとする一般傾向をもつ。國家絶對主義と云ふは此意味である。個人の自由なる利益追求は又全體の利益をも促進するに至ると云ふスミス學派の根本思想に反して、マーカンチリズムは個人の利益と全體の利益と一致せざること多きを知り、従つて個人の利益は全體の利益に屈從すべしとふ思想を根據とするものである。併しこれが爲に如何なる種類程度の監督指導を必要とするやは一國の事情、經濟發展の程度によりて自ら異なるべきである。ヘルドの云ふ所に従へば、警察的監督の最も甚しき時代を以てマーカン

チリズムの盛期としなければならぬことになる。さればこそヘルドは多くの學者がマーカンチリストの典型として異論なき所のトマス・マンに於て却て警察的國家の精神なきを云つてゐるのである⁽¹⁾。何ぞ知らん、トマス・マンの時代は、既に煩雜なる警察國家の階段を経過してゐたのである。トマス・マンが從來の警察的監視に反對せるは、その到底所期の目的を達し得ざるを洞觀したるが故である。國家の利益を先頭とすべき主張は之によつて毫も減殺されたるものではない。事は手段の選擇に關し、目的の變改に關しない。マンよりも遙に後年のゼームス・スチュアルトに於て國家絶對主義は次の如き興味ある一節を以て現はれてゐる。マーカンチリストの眞髓は言々句々の間に躍動せりと云ふべきである。『歐羅巴の商業國は、或港への先着を競へる一隊の船舶を以てあらはされる。各國の政治家は其船長である。同一の風が凡ての船に吹きあててゐる。そして此風と云ふのは、各消費者をして最廉の最上の市場をさがさしむる所の利己主義である。これよりも一般的にして、不斷なる商業風なるものはない。各國の自然的長所は各船舶の堅固の度合を代表する、併し最も巧妙に其船を操り、敵船を其風下に置くことの出来る船長は、他の條件同一なる限り、確實に彼等の機先を制し、また其優位を維持する』⁽²⁾ (Principle of Political Economy, BK. II. ch. XII. vol. I. P. 233)

インスブルグ大學教授ビダーマンの小著⁽²⁾はマーカンチリズムの意義に關して幾多の疑問を

(1) Held. *ibid.* SS. 26—27

(2) H. J. Bidermann, über den Merkantilismus, 1870

提出し來つて自己の見解を確立せんとする極めて有益なる試みである。彼は多くの獨佛學者の下したる解釋を批評し、殊にマーカンチリズムの本質が貨幣と富との混同にあらざることを論述し、進んでマーカンチリストの共通なる根本思想をさぐらんとして、之を次の如き形に纏めた。

國民の幸福 (Wohlfahrt) は、その各人の財産と要額とが常に正しい關係にある場合、換言すれば互に相蔽ふ場合に於て存在する。これが一般的になればなるほど、幸福はそれだけ發達し、それだけ普及し、國民の富はそれだけ有效になる。併し此正しい關係は二つの事を前提とする。第一、その時、消費必要物が存在すること。第二、之を要求する者にそれが常に速に供給され得ること。是である。要求物を常に自ら生産することが最も安全ではあるが、これ多くの消費者には不可能であるから、各人自己に適したものを作つて、之を要求物と交換せんとする。然るに此交換は直接行はること少なく、原則として貨幣即ち一般的交換の要具を使用する。従つて貨幣の介在せざる時は、分業が止み、なほ要求の對象物を獲得し得ざることになるか、或は多くの慾望を斷念しなければならないことになる。勿論貨幣の所有それ自體では、前提の關係を樹立するには足らない。直接に必要な消費物の存在を要する。然るに、その存在の條件は之が生産(當該消費者が生産せざる時は、他人が)である。併し誰が之を生産せんとする

も貨幣がない時は、多くは生産が出来ない、蓋し生産の爲には豫め多くの物を買はねばならぬからである。否、生産せんとする志望すら、一般に製品に對して貨幣を得るといふ期待によつて制約されてゐる。従つて貨幣の缺乏は財の分配を阻害するのみならず、その生産を阻害する。要求があるにも拘らず生産が之に不足するとか、製品が其眞の目的點に達しないとか云ふのは、貨幣缺乏の爲である。その結果として國民經濟が思ふままに發達しない。これによつて最も害される者は手を働かして生計を得る階級である、蓋し此階級にとつては仕事の不足は普通飢餓と困窮と同意義であるからである。

處が貨幣は、その必要な時常に自由に存在するものと限らない、生産の補助、分配の要具としての二重の役目を働かしめるが爲には、之を人爲的に招來し來り、一定の流通の軌道に保たねばならないことが稀でない。この種の強制が國民の一部に損害を與へても、これによつて國民の幸福は一般的に向上し、従つて、國家が其貨幣必要額を調達する爲に最も期待した所の人々の納税力も増加する。なほ是によつて生ずる損害も實は一時的犠牲であつて、却て享樂の永存を保障するものではないかとも思はれる。此犠牲を課するに就て政府が更に躊躇するを要しない一つの理由は、貨幣の處分權は、貨幣が既に私人の所有へ歸したる後に於ても、根本に於ては政府に屬するといふことである。何故ならば、貨幣は其通用を、主として、公の官憲に負

ひ従つて又、官憲は其流通を規定によつて律してもよい譯である。貨幣の人爲的招來又はその強制的利用が生ずる所の損失は、この效果の國民經濟的重要によつて十分に補はれる。貨幣金屬の取引上に於ける交換價值がいくらであらうとも、商品の交換を中介し、資本蓄積を進むる國民的財としての、その使用性は、かの價值を超過し、又それは、かの損失を被りたる者に國家が與ふべき賠償の正當な標準である。――

マーカンチリストの大部分の著書を探求する時、上述の如き思想が表白される、これ彼等の學問的發表の核子であり、彼等の國民經濟的知識の概約である。――ビダーマンは斯の如く論ず⁽¹⁾。

ビダーマンは、かくて個々のマーカンチリストに就き、如上の見解を立證せんと試みてゐる。彼の論述は、マーカンチリストに於ける貨幣尊重の本體を闡明して餘蘊なきものと云ふべきである。併し吾人は之を以てマーカンチリズムの本質を表白したるものと考ふることは出来ない。貨幣尊重は何の爲に存在するか。國民經濟の富強の爲である。國民經濟の富強は何の爲に求めらるるか。外國に對する自國の強大の爲である。外國に對する自國の主張、或は發展てふ目的を考慮せずしてマーカンチリズムの本質を捉ふことは出来ないと考へる。

硬學シュモラーの有名なるマーカンチリズム論は既にヘルドによつて始められたる立場――

(1) ibid. SS. 18—20

政治的傾向に重きを置く立場と類似の立脚點に於て、マーカンチリズムの本質を把握せんとするものである。曰く『マーカンチリズムは其眞乎の中核に於て、國家の形成に外ならない——否、國家の形成そのみにあらず、國家の形成と國民經濟の形成の併立である、今日の意味に於ける國家の形成、即ち國家的社會を同時に國民經濟的社會とし、以て之により、高き意義を與へんとすることである。此システムの本質は貨幣増殖或は貿易差額に關する或種學說や、關稅線、保護關稅及び航海條例如きに存するにあらずして、更により、大なる或物にあるのである。

——即ち社會及び其組織並に國家及び其制度の徹底的改造、地方的農業的經濟政策の國家的及び國民的經濟政策による轉換にあるのである』と⁽¹⁾。狹少なる經濟的社會が大いなる國民的社會に進展したる、變革の中に、マーカンチリズム政策の成立を認めんとするシュモラーの企圖によつて、此問題は初めて正當なる軌道に置かれたと云ふことが出来る。尤もシュモラー以前に於てハイキングは好著『貿易差額說の歴史』⁽²⁾に於て、假令定義的にマーカンチリズムの意義を確立することなく、又貿易差額說に重きを置きたりと雖、能くマーカンチリズム成立の經過を敘するに、近世國家成立の過程を中心とし、國家對立の意識に、中世紀的政策と對比せらるべき新政策發展の搖籃を認めんとした。吾人の立場は、此ハイキング及びシュモラーの所說に負ふ所大なるものである。

(1) Schmoller, Das Merkantilssystem in seiner historischen Bedeutung (Jahrb. f. Gesetzgeb., Verültg u. Verwtschft, 1554, SS. 43—44)

(2) Hurling, Zur Geschichte d. Handelsbilanztheorie, 1880

近來の著者は大體に於て傾向を等しうす。例へばマックス・ウェーバーは曰く『マーカンチリズムは、資本主義的營利經營の政策への轉移を意味する。國家は恰も、ただ獨り資本主義的企業家より成るが如く取扱はる。外部に對する經濟政策は敵を壓倒せんこと、出来るだけ安く買込み、出来るだけ高く賣捌かんとの原理に立脚す。目的は外部に對する國家機關の力を強大ならしむるにある。マーカンチリズムは從つて、近代權力國家の形成を意味す、而して其手段は、直接には王侯の歲入増加にあり、間接には國民の納稅力増進にあり』と⁽¹⁾。

モンペルトも近著經濟學史に於てシュモラーの立場をとる。彼はマーカンチリズムの語を不適當なりとして、國家經濟派(Die staatswirtschaftliche Richtung)の名稱に其特徴を表はさんとし、個人はあらゆる方面に於て全體(國家)の爲に奉仕し、その利益を擧げて國家の目的に従ふべく、從つて經濟も亦國家の目的に奉仕すべしとの傾向に、その本質を求めんとする。『當時の經濟的思惟の中核は一國の經濟を、國家の力の發展に最も有效なるが如き方向に向くるが爲には、如何なる手段と方法が最も適當なるかの問題に對する答解であつた。此理由——國家に對する經濟の屈從、國家による經濟の規律——より、此時代を經濟的思惟の國家經濟派と呼ぶのが、假令細點に於て少なからざる相異ありとは云へ、最もよく本質に觸れるやうに思ふ』と⁽²⁾。

(1) M. Weber, Wirtschaftsgeschichte, 1923, SS. 296—297

(2) Mombert, Geschichte d. Nationalökonomie, 1927 SS. 117—118